
ケロケロポーション！

卯月海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケロケロポーション！

【Nコード】

N4149N

【作者名】

卯月海人

【あらすじ】

コバルトノベル大賞二次落ち作品です。文章や改行など要修正箇所は多々あるのですが、あえて応募した時のまま掲載します。携帯からだと詰め込みすぎで読みにくいかもしれませんがご了承ください。内容は、魔女や魔法使いのいるファンタジックな異世界で、とあるおちこぼれ魔女が奮闘する短めのお話です。『おちこぼれ魔女のミルテは、落とした薬瓶を拾ってくれたおかしい蛙に、蛙変身薬を作るよう要求される。その理由はなんと、恋した人間を蛙にしたというもので——』王道ファンタジーをお楽しみください。

前編 （前書き）

この作品は、コベルトノベル大賞二次落ち作品です。

文章や改行など、要修正箇所は多々あるのですが、あえて投稿時のまま掲載します。

詰まり過ぎて読みにくいとは思いますが、ご了承ください。

また、この作品は9月のアルファポリスファンタジー大賞にエントリー予定です。

もしお気に召しましたら、作品下の投票ボタンを押してください。

応援メッセージ、感想も大歓迎です。

小説家になろうの感想欄への記入か、もしくは拍手メッセージで送りください。

後編は9月序旬に投稿予定です。

前編

『人生の豊かさは、才能の豊かさでは決まらない』

いつも心の片隅にあるこの言葉。最初に言っただのは伝説の魔法使い、ブレット・キアスだったか、それとも月にまで行ったという大魔女、リビー・パルセルだったか。

ともかく、その言葉を胸に、この壊滅的な才能のなさともなんとか折り合いをつけつつ精一杯前向きに生きてきた。

なのに——現実には、時として残酷だ。

「ああああ……信じらんない」

池の底に沈み行く薬瓶の、黄色い光を食い入るように見つめながら、ミルテは力なく肩を落とした。

せつかく一晩かけて作った試作品。試す前に手を滑らせ瓶ごと池にボチャン、というまぬけぶりに、魔女としての才能以前に、人としての生活能力を疑ってしまう。しかも貴重な材料をつぎこんだ力作だったのに。

まあ、それは調査した時点で惜しまないと決めたのだが、せめて成功したかどうかを知りたかった。失敗したにしても、薬瓶くらいは戻ってこないだろうか。あれだってそこそこ高いのだ。

やはり、ここは潜るしかないだろうか。ミルテは立ち上がった。底が見えないほどに濁った池の水は、弱々しく木漏れ日を弾き、およそ生命の息吹というものが感じられない。

底なしだったらどうしよう、と一瞬不安にかられる。でも行くしかない。もったいない。

と尻込みする心を奮い立たせ、スカートの裾をたくし上げた時。
池の底から黄色い光がせり上がってきた。

「えっ？」

たった今、泥水の奥に消えていったはずの光ではないか？ ミル
テは目を丸くして池の中を覗き込んだ。

間違いない。トートスの実、妖精樹の葉、その他もろもろが混ざ
り合い、結果として黄色く発色した自分の調合薬だ。本には透明な
赤になると記されていたが。

徐々に近づいてくる薬瓶を期待の眼差しで見守っていると、黄色
い光はゆつくりと色を濃くし、とうとう水面からガラスの栓が頭を
突き出した。続いて、その下からよきつと小さな手が生え、瓶を
支えているらしい何かがかくつきりと輪郭をあらわにした途端、ミル
テは声を失うほどに固まった。

かつ、蛙——っ。

ぬめつと怪しく光るその手の主は、多分、恐らく、形からして蛙
だった。

もちろん、珍しい生き物ではない。この池に生息していてもおか
しくはないだろう。だがその全身はなんとも珍しい、かつ毒々しい
紫色で。

「ひっ」

思わず後ずさる。

水面に顔を覗かせた蛙は、今度は水平に瓶を押しながらこちらに
近づいてくる。結構大きい。手の平サイズの小瓶より更にひと回り
くらいでかそうだ。

「いやあ〜！ こないでえ〜！」

堪らずミルテは手近にあった石を投げつけた。

蛙は大の苦手なのだ。そのうえ紫色とくれば、おぞましさ倍増で
視界に入るのすら耐えられない。

「ゲロロッ！」

蛙が喉を鳴らして抗議を訴える。無理もない。近くに落ちた石が

水面を波立たせ、薬瓶を激しく揺らし始めた。

「あっ！」

そこでようやくミルテは気がついた。この蛙は薬瓶を拾ってくれたのではないだろうか。それなのに自分は石を投げたりして、恩知らず極まりない。

蛙は今や、必死に瓶にしがみついている。

ミルテは勇気を振り絞り、おっかなびっくり蛙と瓶に手を伸ばした。が、一歩遅かった。

もう少して手が届こうかという時。ひっくり返った瓶のガラス栓が外れ、中の液体がこぼれ出たのだ。

一見、生命力の強そうな蛙は薬を顔面から浴び、「ゲローツ！」と断末魔のような悲鳴をあげて池に沈み始めた。

「きゃくくっ！　だ、大丈夫？」

ミルテは咄嗟に恐怖も忘れて蛙をすくい上げた。効果が不明な自分の調合薬でもしものがあつたら後味が悪すぎる。

「どうしよう。お、お腹を押したら、吐き出すかなあ？」

手ごろな岩の上に寝かせ、死んだようにぐったりとする蛙の膨れ上がったお腹を、ともすれば逃げ出したくなる嫌悪感を押し殺しつつ、ぷに、っと指先で突つついてみる。

途端。

「やめいっ！　殺す気か？」

怯え混じりの怒声をあげつつ、蛙が起き上がった。

蛙が……喋った……？

しかも意外と可愛い声で。

「おっ？　なんだこれは。言葉が喋れる！」

幻聴？　ミルテはぽかんと口を開けて、この一見普通の……色はともかくとして、形は普通の蛙に見入った。

魔女の中には動物の言葉がわかる者もいるが、自分にその能力はないはずだ。

「さっきの黄色い液体のせいかな？　おい、あれはなんだ？」

問われてハッとそのことを思い出す。

「あ、あれ、私が作った薬なの。濁った水を真水にする薬……」

と説明しながら池に目を向ける。今言った通りの効果があるなら、この枯葉色に濁った池は澄んだ青になっているはずだ。薬は全て流れてしまったのだから。

「……変わってないな」

蛙の平坦な声が寒々とした心に響く。

その通りだった。池の水は相変わらずの枯れ葉色で、透明度を増した様子もない。

「そんなあゝ。妖精樹の葉まで使ったのに……また失敗……」

水面に虚しく漂う空の薬瓶を見つめ、ミルテはへなへなと肩を落とした。

（なんであたしってこうなんだろ……）

「あんだ、魔女が」

微かに敵意のこめられた声に視線を戻す。

警戒するような目で蛙が睨んでいる。いや、実際警戒しているのだろう。魔女といえば普通、蛙を使い魔として使役したり、薬の材料に使ったりする、いわば天敵だ。

「うん。一応ね」

ミルテは力なく笑ってみせた。質素な緑のワンピースに白いエプロン。ゆるくふたつに結んだ髪は、まだあどけなさの残るふつくらとした頬にかかって、ミルテの見た目は、そこらにいる村娘となら変わりはない。

実際、魔女といえる力など、“ホウキで空を飛ぶ”くらいしかないのだから“一応”という言葉にも実感がこもるというものだ。

せめて簡単な魔法薬の調合くらいは……と、こうしてせっせと修行しているものの、基本中の基本である傷薬くらいしかまともに成功するものはない。真水に変える薬だって、下級調合薬に属するのだから、それほど難しいものではないはずなのに。

魔力が、低すぎるのだ。

「落ちこぼれだけどね……」

付け加えた言葉と共に頭が垂れ下がる。

わかっている。どうしようもないことだとはよくわかっている。

落ちこぼれは落ちこぼれているしかないのだ。魔女である以上は。

でも諦めきれないミルテは、これまでに何度も必要魔力の低い様々な魔法薬に挑戦しては、苦い失敗を繰り返していたのである。

蛙は沈黙し、どんよりと落ち込むミルテをしばし値踏みする目で眺め回していたが、思い切ったように口を開いた。

「まあこの際魔女でもいい。おい、あんた。俺を魔法で今すぐ人間にしてくれ！」

「人間に？」

ミルテはびつくりして蛙をまじまじと見返した。

「魔法で今すぐ？ 無理よ。私たち魔女が魔法を使うには、儀式とか薬とかが必要なの。呪文ひとつで魔法が使える魔法使いとは違うのよ」

魔女と魔法使い。どちらも魔法で人を助く仕事を請け負うのはよく知られているが、魔女の外見上に特徴がないためか、一般人にはよく混同される。どちらにしろ同じ魔法使いだろう、と。しかし、実は似ていて非なるものである。

魔女とは、女魔法使いのことではない。

魔女とは生まれながらにして魔法の使える“種族”であり、魔法使いとは修行した末に神秘の力を会得した人間が就く“職業”なのだ。魔法の系統も全く違う。魔法使いに魔女の魔法は使えないし、魔女も魔法使いの力を会得することはできない。

ミルテはこれでも一応、“魔女の血統”に生まれ、“魔女の血”を有す真正正銘の“魔女”なのである。

「ん？ ……ああそうか。人間に変身するには儀式が必要か……」

一度地面に目線を落とした蛙は、事情通なのか、考えをまとめるように何やらぶつぶつと呟いた。ややあって、キツと力強い目でミ

ルテを見上げる。

「じゃあ、その儀式魔法をやってくれ」

「ごめんなさい。それも無理」

ミルテは顔を曇らせた。

「私、すつごく魔力が低い。人間に变身する魔法なんて難易度高すぎて……。簡単な魔法薬を作るのが精一杯」

自分で言う可悲しいものがある。複雑な儀式魔法はおろか、中級調査薬ですらミルテには高嶺の花だ。

さっきの薬がいい証拠とばかりに池を目で示すと、蛙は「んがつ！」と固まった。

お役に立てず申し訳ない……。少しばかり胸が痛む。しかし、そう思ったのも束の間、

「いや待てよ」

と蛙はすぐに立ち直り、

「じゃあ、人間を蛙にする薬は作れるか？」

身を乗り出して訊いてきた。

ミルテはしばし考え、それなら、と頷いた。蛙变身薬は下級調査薬なので、難易度は低いほうである。もちろん、「効果は保証しないけど」と付け加えるのは忘れなかった。

しかし、それにしても。

「人間を蛙にする薬なんて、何に使うの？」

「人間を蛙にするために決まってるだろ」

「何のために？」

少しイラッとした。蛙の口調は人にものを頼む態度としてはあまりに尊大である。まあ人間の礼儀作法など、蛙の知ったことではないだろうが。

「それは……」と蛙は口を開けた。しかし言いづらいのか、もごもごとしばらく口ごもる。

ミルテは次の言葉を大人しく待ったが、なかなか蛙が話そうとしないので地面にぺたんと座り込んだ。屈んだ姿勢に疲れてきたのだ。

頭上のあかがね色の木の枝に、この森に多く生息している青い小鳥が飛び交い、ひっきりなしにさえずっている。

ピールル、ピールル。

“歌い森”というこの森の名の由来になっている鳥である。ここに住んで一年ほど経つが、わりと聞き飽きない。

足元の強壮剤の材料にもなるピンクの花きのことを暇潰しに引っこ抜いていると、ようやく蛙が意を決したのかぼそぼそと話し始めた。

「あー……つまり、あれだ。好きになった人間がいるんだ」
ぴたっときのこを引き抜く手が止まった。

「好きに……あなたが？ 人間を？」

「ああ。一目惚れってやつだ。だからその人間と何とか仲良くなりたいと、つまりはそういうわけだ」
そういうわけ……って。

「ちよつと待つて。まさか、その“好きになった人間”に飲ませるつもりで薬が欲しいの？ 作るのは相手の了解を得てからでもいいんじゃない？」

「俺はこんな蛙だぞ。了解してくれるわけないだろ」

「じゃ、もしかしてこっそり飲ませるつもりなの？ そんなのダメよ！ そんなことするなら薬は作らないわよ！」

ミルテは雲行きの怪しい話に驚いて立ち上がった。

種族を超えた恋なんて、ロマンチックだなーなどと思えたのはほんの一瞬で、蛙の身勝手さに腹が立つ。自分の想いを叶えるために相手の姿を無理矢理変えようだなんて、傲慢もいいところだ。

「俺はあんたの薬を拾ってやった恩人……恩蛙だぞ」

うつ、とミルテは言葉を詰まらせた。

大事な薬瓶をこの蛙が拾ってくれたのは事実だった。中身はなくなってしまったものの、それはミルテが石を投げたからであり、もとよりこの池に対して使うつもりだったので問題ない。

つまり、まぎれもない恩があるのだ。この蛙には。

「せっかく親切心で拾ってやったのに、まさか石で殺されかけると

はな」

「ごめんなさい。私、蛇とか蛙とかつて苦手なものだから……」

「魔女のくせにか？ 蛇や蛙が苦手な魔女なんて聞いたことがないぞ」

「だから落ちこぼれなわけで」

とほほ、と肩を落とすミルテを蛙は呆れ混じりの半眼で見つめてくる。返す言葉もない。

「で、落ちこぼれの魔女さんは、このうえ恩知らずにも頼みを断ったりはしないよな？」

魔女は義に厚い種族であり、恩を仇で返すなどもつてのほかとしているのはよく知られている。そこを突かれるとかなり痛い。

だが勝手に蛙にされた人間はたまったものじゃないだろう。下手したら犯罪だし。どうしよう？ 断れないけど断りたい。

ピールルル、ピールルル。陽気な歌声が、絶え間なく降り注ぐ。

あーうー、としばらく悩んでいたミルテだったが、そのうち、はたと気がついた。

そうだ。変身薬の効果時間は、短かった気がする。一生ではない。それなら。

数時間、だけですから。

ごめんなさい。蛙の相手をしてあげてください。

想像の中の、蛙に恋された見知らぬ誰かを拝み倒し、とうとうミルテは、柔らかな木漏れ日の中、沈痛な面持ちで頷いたのだった。

「あつた、これこれ」

全ての壁が棚で埋められ、またその棚に瓶やら壺やら本やらが所狭しと並べられたその部屋は、雑然とした印象を拭えない。しかもキツイ香木を何種類も炊き合わせたような匂いが鼻をつく。どこの部屋といって、ミルテの調合部屋だ。

部屋の中央には大きな石窯があり、黒い鍋が鎮座している。魔女なら誰しも持っている“魔女の鍋”である。これを“森火”^{もりび}と呼ば

れる深緑の火にかけることで中の薬に魔力をこめることができる。

すり鉢など道具類の散乱する机の上に置かれ、器用にも顔をしかめる蛙を残し、ミルテは本棚を漁っていた。そして見つけた目当ての本を手に蛙のもとに戻り、邪魔な道具類を脇にどかして作ったスペースに本を広げ、とあるページを指で示した。

「下級調合・変身薬のレシピ集よ。蛙変身薬はこれ」

そこには、わかりやすく蛙の絵が描かれていた。文字を目で追いながら、ミルテは必要な材料をぶつぶつと読み上げる。

「チクリ蜂の蜜、月光水……はあるかな。アモスの実、百年草、熊耳草、緋喰い鳥の羽……うん、大丈夫。あとは蛙の油……」

言いながら、何かを考えるように視線をさまよわせた後、大人しくミルテを見守る紫色の蛙に焦点をあわせる。蟻を閉じ込めた琥珀みたいな目がきょとんと瞬いた。

「ん？ 俺の油か？ 別にいいが、油ってどうやって取るんだ？」

「まあ、普通に考えれば、ぎゅーって絞り取るんじゃないかしら」

「そうかぎゅー……って死なないか俺？」

「運がよければ死なないかも」

「ふざけるな。別の方法を考える」

ただでさえギョロリとした琥珀色の目に睨まれ、ミルテは「そ、そうよね、あはは」とごまかし笑いを浮かべながら顔をそらした。

大分見慣れてきたが、やはり蛙はまだ怖い。

「ま、まあそれは後で調べるとして……あとモジモジ草の花つてのが必要なんだけど、ないから採りにいかなきゃ」

「モジモジ草？ どこにあるんだ？」

「ここからホウキで半時間ほど飛んだところにある花畑の中」と北の方角を指差す。

ホウキは魔女の代表的な移動手段で、足で歩くよりは断然速い。それは落ちこぼれのミルテでも同じであり、半時間も飛ぶということとは結構な距離があるのだった。

「ホウキ、か……」

部屋の隅に立てかけてある、柄の長い伝統的な魔女のホウキを何か言いたげな視線で見やる蛙に、ムツと頬を膨らませる。飛べないほど落ちこぼれじゃない。が、反論を試みようとした時、ちりりと扉のベルが鳴った。

「ミルテ、いる？」

「あつ、ネア！」

ミルテは慌てて入り口に駆けていった。家に入っすぐの部屋はミルテの店になっている。調合部屋はその奥なのだ。

ショートヘアで快活な印象を与える、ミルテと同じ十六、七くらいの女の子が店のカウンターの前に立っていた。スレンダーな体は短いワンピースに覆われ、その下に膝丈ズボンをはいている。隣の森に住む魔女のネアだ。

「こんにちは、ネア。何か入用？」

「やつほー、ミルテ。いつもの薬草を買いにきたわよ」

軽く挨拶を交わし、「はいはい」と棚に並んだ薬壺の中から、きちんと蓋をされた砂色の壺をふたつほど取り出す。

ミルテは採取した薬の材料を近くに住む魔女に売って生計を立てていた。

いっぱしの魔法薬を作り、村人が依頼してくる仕事をこなせる魔女には、そこから入手できる素材の採取も面倒なことなのだ。

「はい、いつものね。他には何かいる？」

「あと、トートスの実をいくつかと……あ、クネクネ草はある？」

「クネクネ草？ 今はちよつと……。追跡の縄でも作るの？」

「うん、珍しくも魔法使いからの依頼だね。泥棒を捕まえたいんですって。発明品を盗まれたそうなの」

檜の木のカウンターに置かれた薬壺がコトリと音をたてた。カウンターの上には紙袋の入った籠なども常備してある。

「へえ」。物騒な話ね。でも魔法使いが発明するものって便利なものが多いから、欲しくなる気持ちもわかるけど。ずっと明かりの消えないランプとかね」

「そうそう。嚴重に管理しておかないほうが悪いのよ。なんでもかんでも発明して。おかげでこっちの商売あがったりだわ」

壺の蓋を開け、籠から紙袋を取り出しながらネアの話に耳を傾ける。

両手を広げて愚痴をこぼすネアの口調は、不満一色ながら、しかし羨望も少なからず含んでいることを隠しきれていない。

ミルテは素直に羨ましかった。

「魔法使いの数も増えていつてるしね。修行して経験を積みれば、どこまでも魔力を高めることができるんだもの。私みたいな落ちこぼれにもまだ希望があるわ。なりたがる人が多いのもわかるかも」

紙袋に薬壺の中身を移す手を止め、しみじみと呟くと、悪いことを言っただと思っただのか、憤然としていたネアのいかり肩が落とされた。

「ミルテ……。魔女の血が薄かるうが、あんたはいい魔女よ。ちゃんとこうして自分のできる範囲で仕事をこなしてる」

「薬草の採取とかね」

ミルテはくすりと笑った。

「魔女なんてもう古い、って不満ばかりこぼして働かない連中に比べたら、あんたはよくやってるわ。ささやき谷のドーラとか、黒の森のデアトリーなんか、むしろ付近の住人に迷惑ばかりかけてるんだから。ああいうのがいるから、魔女はタチが悪い、なんて言われるのよ。魔女の恥つたらないわ」

顔をしかめてみせるネアに、ミルテは少し心が軽くなるのを感じた。

「みんな溜まってるのね」

それもこれも、魔女が“血”に縛られる古い種族だということが原因だ。

魔女としての能力は生まれ落ちたその瞬間から決められ、いくら修行しても変わることはない。脈々と受け継がれる“魔女の血”の濃さが魔力を決定してしまうからだ。

それ故、必然として時代が移り変わることにより魔女の力は弱まり、それが若い魔女達の不満の種になっているのだ。

「でもだからって魔女以外の何者にもなりようがないし、結局はただのぐうたらよ。ああいうのこそ落ちこぼれっていうの。あんたはしつかりした魔女よ。もっと自信を持つて」

ぎゅっと熱く手を握られ、ミルテは心まで温まるような、しかしどこか淋しいような、不思議な気持ちになった。

ネアはいつもこうしてミルテを励ましてくれる。それは嬉しいことなのだが、結局、採取しかやれることがないという事実が変わりはなく、ただの慰めにしかない。

だがそれは贅沢というものだろう。慰めてくれる友達がいるだけでも幸せなことだ。

だからミルテはにこっと笑ってみせた。

そして「ありがとう」と口を開きかけた時、ネアの顔が悪戯っぽく笑った。

「だからクネクネ草、お願いね」

「ちょっと。今の感動を返してよ！ 結局はそこなの？」

「だってうちの森には生えてないんだもの」

えへっ、と可愛くごまかされる。仕方ないなあ、とミルテもつられて笑った。

「それにしても、盗まれた発明品って何かしらね。危険なものじゃなきゃいいんだけど」

「そうね。欠陥品だから大丈夫だとは言ってたけど、完成したら結構やばい物だったみたい。魔法の鏡だって」

「え？ もしかして、映ったものを吸い込むとか、そういう感じの？」

鏡と聞くとまず頭に浮かぶのは、映ったものの姿をどうこうするとか、吸い込むとかいう作用だった。

それは禁制に近い。人に害をなす魔法品は発明を禁止されているので、その魔法使いがこっそり魔女に相談してきたのも頷けた。

「それに近いみたいだけど……、詳しくは教えてもらえなかったわ。まったく。ろくでもない物を発明するわね、あいつらは。なんか偉そうだし、魔法使いっていい好きじゃない」

ネアの評価は辛口だ。しかしそれはネアに限ったことではなく、魔女は全体的に魔法使いを嫌う傾向にある。

「ふーん……。私はまだ会ったことないからよくわからないけど。

『魔法使いは英知を極める職業だ』とか謳ってるくらいだから、プライドが高いんじゃない？」

「友達にしたいくないタイプよね、絶対」

「あははは。確かにそうかも」

ミルテは特に魔法使いが嫌いではないが、耳にする評判はこういったものばかりなので、なんとなく高飛車なイメージを持っていた。相槌を打ちながら、次の商品を取り出すべく踵を返す。

トートスの実が入った黒い壺はいつも左の棚に置いてあるのだ。

しかしその場所は今、ぽっかりと穴が開いたような空間に変わっていて、ミルテは首を捻った。

ぐるりと店内を見回し、視点が奥の調合部屋に行き着くと、途端、謎が解けた。トートスの実は“濁った水を真水に変える薬”に使ったばかりだ。でもまだ残っているはず。

ネアを待たせ、調合部屋に向かう。

雑然とした部屋をそれほど探し回ることなく、テーブルの上に黒い壺を見つける。無造作に置かれた道具類と一緒にたなっていた。後片付け、整理整頓はどうも苦手なのだ。

ふと横を見ると、蛙がいはいばだらけの近寄りがたい背中をこちらに向け、ちょこんと静かに佇んでいた。

なんだかその背中が淋しげに見える。

「待たせちゃってごめんね。退屈？」

声をかけるが、背中は何もない。

「別に」

ひどくそっけない答えがすねているように聞こえ、ミルテは首を

かしげながら、壺を手にはネアのもとへと戻っていった。

「だあああああああ！」

腰のあたりから大絶叫に近い悲鳴が幾度も漏れては風にさらわれていく。

それにいちいち構ってはいられない。ホウキで空を飛んでいるときはそれに集中しないと、すぐにコントロールを失ってしまうのだ。墜落しかけたことも一度や二度ではない。

けど必死に集中するためか、スピードは自慢できる速さだ。年に一度の魔女祭りホウキレースではいつも上位に食い込んでいる。

「死ぬっ！ 内臓が出るっ！ マジで出るぞおいっ！」

腰からの訴えが必死さを増してきた。ミルテは仕方なく、少しだけスピードを緩めてあげた。……ほんの少しだけ。

ホウキにしがみついていた姿勢から上体を起こすと、風がもろにぶつかってくる。

吹き飛ばされないよう、しっかりと指先から魔力を注入しなおし、風の勢いに一度細めた目を周囲にこらす。

きれい。

無限に続く、白と青のグラデーションの空が自分を包んでいる。

眼下には深い森。緑だけでなく、鮮やかな赤と青の入り混じる色彩豊かな森は、見慣れているのに何度見ても飽きないほどに美しい。ミルテは空を飛ぶのが好きだった。

こうしてホウキにまたがり、雄大な自然に溶け込んでいると、やっぱり自分は魔女だと実感できるのだ。落ちこぼれであることさえ時たま忘れてしまえそうになる。

心地良い風に、うつとりと目を閉じる。と。

「頼むからもつとゆっくり飛んでくれ！」

「うるさいなあ」

ミルテは腰帯に括りつけた瓶にちらりと冷たい視線を向けた。大きめな瓶の中には紫色の蛙と少しの水が入っている。蓋は穴を開け

た平べつたいコルク栓。環境はすこぶる良いはずだ。文句を言われる筋合いはない。

「いま話しかけないで、集中が切れるじゃない！ 内臓が出そうなら手で押さえてて！」

怒鳴りつけた後に、視界前方を埋め尽くす森の一部が途切れ、目的地である花畑の光が見えてきた。

太陽光を反射しているだけではないその光は、ぐんぐんと面積を増していく。

黄色を下地に、ピンク、薄青、バイオレット、色とりどりの渦巻き模様を織り込んだ花の絨毯が全貌を現した。周囲は森の木々に囲まれ、歩いて辿り着くのは大変だが、上空から探すとこれほどまでに一目瞭然だ。

ミルテは再び上半身を低く構えた。

「降りるわよ！」

一声高く宣言すると共に、直滑降に近い形で地上に突っ込んでいく。さすがに息が苦しい。蛙の悲鳴が裏返る。

「うわあああああああ！」

花畑の中に降り立つつもりはない。手前の森の木々に向かい、ホウキを操る。

慎重、かつ大胆に。なんとかうまく木々の間に滑り込み、細いつぺんを後方へと流しながら、次々と小枝を折り、葉っぱを散らし、ミルテは落下——もとい、降下していった。

怖くない、といえば嘘になる。しかし毎度のことなのでいい加減慣れた作業だ。

地上が迫ってきたので、飛び立つときのイメージを思い浮かべると、ふわりとした空気に包まれ、一瞬浮き上がる。

そして再びゆっくりと落下を始めるその瞬間を狙い、手ごろな枝をしっかりと掴む。

もう大丈夫。飛ばなくてもなんとかなる。

頭を空っぽにし、ホウキから魔力を解放すると、途端、腕にずし

つとした重みがかかり、重力が戻ったことがわかった。

そのまま風に飛ばされかけた糞虫のように、ミルテはぶらーんぶらーんと体を揺らした。

片手にはホウキ、もう片手には木の枝。

髪はボサボサ、スカートが一部めくれあがった、そんな状態でホツと安堵の息を吐き出したミルテの表情は「ひと仕事終えました!」といわんばかりの達成感を滲ませていた。

瓶の中でひっくりかえった蛙にキツパリと言い放つ。

「着地成功よ!」

「どこがだ!」

蛙は納得してくれなかった。

「あんた……ホウキに乗ると性格変わるタイプなんだな」

木を伝い降り、地面の土を踏みしめた後、瓶の中からしみじみとした声で蛙が言った。

ミルテは「そう?」と小首をかしげた。

「ホウキのコントロールって結構難しいのよ。ゆっくり降りるのかすごく苦手。失敗して地面に激突するくらいなら、木を伝って降りた方がいいでしょ?」

「飛ぶのをやめるといふ発想はないのか。いつか死ぬぞ」

「失礼ね。一応着地できてるんだからいいじゃない。私にとって唯一魔女といえる能力なのよ」

「落ちこぼれの真髄を見た気がする……」

「ほんつとに失礼ね!」

ホウキの先で背の高い草を乱暴にかきわけながら花畑への道なき道を早足で歩く。

確かにホウキの操縦は上手いとは言えないが、飛べてるんだから問題ない、がミルテの持論だった。

それに、薬草の採取について行きたいという蛙のわがまを聞いてあげてるのに、バカにされるいわれはない。いや少しはあるかも

しれないが。

「動物と話せるってどんな感じなんだろう、って思ってたけどあんまり楽しくはないわね。蛙はみんな、あなたみたいに偉そうなの？」
「つい言葉もとんがってしまう。」

「さあな。他の蛙と喋ったことがないから、俺にはわからんな」

「え？ 喋ったことないの？」

思わず聞き返した。

「やつらは意味のある言葉は喋らない。大抵は気分に乗って歌ってるだけだ」

「やつら、って、同じ蛙なのに」

「そうだが俺は特殊だからな。色もこのとおりだし、他の蛙は寄ってこない。友達にしたいくないタイプ、ってやつなんだろう」

「そ、そう？」

どこかで聞いたような言葉だ。

「でも輪の中にしばらく入ってたなら、仲良くできるんじゃない？」

「気を遣わなくてもいい。別に仲良くしたいとも思わないしな」

「そんな淋しいこと……」

「淋しくなんかないさ」

ツン、と前方を見据える蛙を、ミルテは悪いことをしたような気持ちになって見つめた。気にしていることだったかもしれない。

「で、でも、好きな人がいるんでしょ？ その人と一緒にいたいから、蛙にしたいんでしょ？ その結論はどうかと思うけど、やっぱり一匹より二匹がいいってことじゃない？」

「……………」

「大丈夫！ 誠意を持って接すれば、きっと仲良くなれるわよ！ 他の蛙とも、その好きな人とも！ ちょっと意地っ張りで言葉にトゲがあるけど、よく見てみれば愛嬌がないこともないし……」

「やめる。なんだかみじめな気分になってくる」

「そ、そう？」

怒った声で遮られ、ミルテはごまかし笑いを浮かべた。フォロー

には失敗したらしい。

蛙はああ言ってるが、本当は友達が欲しさに違いない、とミルテは思った。意地を張っているのが言葉の端々からみえみえなのだ。「ずっと一緒にいたいとは思ってないさ。変身薬の効果だって、永遠じゃないだろう?」

と、探るような目をチラリと向けられ、ドキツとする。

「うん。儀式魔法とは違って薬での変身は効果時間が確かに短いけど……知ってたの?」

「魔女に使役されてたこともあったからな」

「えっ、なんだか意外。そっか……。効果時間はこめた魔力によるけど、数時間つてところかな。その好きな人間と一生を添い遂げるのは無理なんだけど……。それでもいいの?」

上からではわからない蛙の表情をつい窺うように見下ろすと、

「ああ、充分だ。少しでも同じ蛙として過ごせればいい」

思わぬ真剣な返事に、ひゃあ、とミルテは頬を包みこんだ。聞いたこっちが恥ずかしい。

「い、いきなり熱いこと言うわね。そんなにその人のことが好きなんだ?」

「ああ? ……あ、ま、まあ、そうだな。好き……だとも」

心なしに蛙の色が赤くなった気がする。さすがに好きな人の話になると違う。

「やだ、クールぶって、実は結構情熱的なんじゃない」

「うるさいな!」

その反応が面白くて、ついついからかいたくなってしまう。言うことはいちいちひっかかる蛙だが、いじってみると結構可愛いかもしれない、とミルテは微笑んだ。

「ねえ、その好きな人ってどんな人?」

段々と蛙の恋に興味が湧いてきた。

しかし質問を受けると、拍子抜けなことに、蛙の色はもとの可愛くない紫に戻ってしまう。

「どんな人……かな。とりあえず髪は長い」

「なにそのそっけない印象は。顔はどんな感じ？　きれいな人？」

「悪くない……と思う」

「外見を好きになったわけじゃないのね。優しい人なの？」

「性格はどちらかというとひねくれて……って、どうでもいいだろそんなこと！　根掘り葉掘り聞くな！」

再び赤くなつた蛙が咬みつかんばかりにぴちよんぴちよんと瓶の中で飛び跳ねる。

反応がいまいち読めないのは、難しいお年頃、ってやつなのだろうか。

「ごめんなさい。なんだか面白くってつい」

むくれてしまった蛙の機嫌を直そうと、ミルテは両手を合わせて謝つた。しかしどうしても口の端が可笑しくてひくついてしまう。

「ねえ、そういえばあなたって名前はないの？」

「名前か？　俺の名は——いや、ない。蛙だからな」

「じゃあ、私が名前をつけてもいい？　そうねえ……フロンってどう？」

「どう……って、別にどう呼ばれてもかまわないが」

なんでそんなことを、と言いたげな訝しげな声。ミルテは腰帯から瓶を外した。

「じゃあフロンにしましょ、フロン」

「蛙が苦手なんじゃなかったのか？」

「うん、それは確かにそうなんだけど……段々慣れてきたみたい」

瓶を目の高さまで持ち上げる。蛙と真正面から向き合うとまだ少しぞわっとくるが、なんとかこらえ、親しみをこめた笑顔を見せる。

蛙——フロンは戸惑っているのか、うまく言葉が出てこなさげに、琥珀色の目をぱちくりとさせた。

その様子がますます可笑しくて、残っていた嫌悪感もどこかに吹き飛んでしまう。

恋する蛙と話すのは、なかなか悪くない。しかし、そう思った

直後、

「……俺は、魔女と馴れ合う気はない」

冷たい声突きつけるように放たれ、楽しい気持ちは一瞬にしてしぼんでしまった。

「あ、そ」

ミルテはがっかりして瓶を腰帯に結びなおした。

やっぱりこの蛙とは仲良くなれそうにない。

気まずい沈黙をかかえながら、しばらく森の中をざくざくと進んでいく。

やがて、大きな木の根を飛び越えたのを最後に、樹木は視界から消え。

前方を覆いつくす丈の高い草むらから、青い空と、そこにゆつたりと流れる羊のような雲が「こんにちは」とばかりにひよっこりと現れて。

その下に、花の波が連なった。

「さ、私が薬草を探してる間、フロンはここでのんびりしていいわよ」

ミルテは地面の上にそつと瓶を傾け、フロンに外に出るよう促した。

花畑の中の、平べったい草を敷き詰めたようなところだ。普通の蛙なら緑にまぎれてしまっただろうが、フロンなら花が密集しているところより見失いにくい。

「クネクネ草もちょうどこの辺りにあるのよ。暗くなる前に見つきたいから急ぐわね」

そう言い置いて立ち上がるが、

「なんか眩しいな」

目をぱちぱちとさせて眩くフロンの言葉に足を止める。

「フロンも眩しいの？」

「も」というのには訳がある。魔女である自分が眩しいと感じるの

はもちろんだが、蛙のフロンにも同じような光景が見えているのか不思議だったからだ。

魔女には、魔力を帯びた物質が光って見えるという特性がある。といっても陽光を反射する湖面のようにキラキラと煌めく光ではなく、ぼんやりとした光の膜がうつすら張っているように見える程度のものなのだが、魔法薬の材料となる物質を探し出すのにはとても便利な能力だ。

しかし、便利なだけで終わらないのは、この花畑のような場所に来た時である。

この花畑は自然にできたというより、花の意志によって作られたといってもいい。

もとは小さな空き地だったのだろうが、そこに昔から生えていた花が、この居心地のいい場所を占有したいとばかりに仲間を呼び寄せ、花と敷地を増やしていった。今でも少しずつこの花畑は広がっていている。

そのような生命力の強さは、魔力を帯びた物質と同等の光を発するようになる。たとえ薬の材料とまらない草花であっても。

そういうわけで、ひとつひとつの光は弱くとも、そこらじゅうが無節操な光の膜に覆われて見えるこのような場所は、正直、目に痛い。しかも素材となる草花が隠れてしまっただけで見つけ出しにくいというオマケつきだ。

「魔女の目には生命力の強い草花が光って見えるんだけど、蛙もそうなの？」

「は？ 魔女の目？ あ、いや……俺はただ、太陽が当たって見えるから眩しいだけだ」

そりゃそうか、とたいして気にすることなくフロンから視線を外し、再び薄く光る花の絨毯に目を向ける。

目的のものは程なくして見つかった。

ホウキを手に歩く。少し離れたところにある、丈の高い草と赤い花が群生している場所。

人の手よりも大きな葉を茂らせ、ミルテの腰まである高い茎の上に小さな花がいくつも寄り集まったようにのっているその植物は、通称“隠れ家草”といい、その名の通り、さまざまな生き物を葉の下に隠している。

初めて聞くと大抵の人は驚くが、クネクネ草は陽射しの強い日中、こういった丈の高い草の影で直射日光を避けることが多い。クネクネ草は植物でありながら、移動できる珍しい種なのだ。

「えいつ」

ミルテは隠れ家草の中に、ホウキの柄の先端を突っ込ませ、ぐりぐりとかき回した。

うかつに手を差し入れるのは素人のすることだ。

クネクネ草は触れたものに巻きつく習性があり、その力は驚くほどに強い。引き剥がすのには大の男でも苦勞する。

しかし、毒があるわけではないし、きちんとした対処法もある。

それは“灰”だ。

木でも布でも紙でも、何の灰でもいい。とにかく灰をひとふりすれば、一発で大人しくなるのだ。何故そうなるのかは不明だが。

「ん……いないなあ……」

ホウキの先端を取り出し、そこにあの忌まわしい草が巻きついてないのを確認したミルテは、ホッとしたような残念なような、複雑な面持ちで場所を移動した。

蛇が苦手なミルテにとって、まるで蛇のような動きをするクネクネ草は、できればあまり触りたくない草なのである。あのゾツとするウロコと爬虫類特有の目がついてないのが救いではあるが。

隣の茂みにもホウキを突っ込み、しばらくぐりぐりと探してみたが、収穫がないばかりか休んでいたウサギの親子に迷惑をかけて、ミルテはがっかりとホウキをひきずりながらフロンのいる場所に戻った。

「フロン……。どこ？」

眩しい景色に目を凝らし、紫色の湿った背中を探す。

すると、

「どこを見てる。こつちだこつち」

いかにもあの蛙らしいセリフが右側から聞こえ、ミルテはそちらを見やった。

はたして、薄青色の可愛らしい花の群れの中、確かに偉そうな紫のいばいば蛙はいた。

絵本のようなふわふわした背景に、生々しい両生類がなんともミスマッチだ。

「ちよつと。あんまり動かないでよ。見失っちゃうじゃない……」
言いかけて、ミルテはハッと息を呑んだ。

フロンの背後に、もぞもぞと動く茶色く細長い紐のようなものがある。

それはよく見知っているというか、先ほどまで探し求めている薬草そのもので――

「フロン！ 危ない！」

思わず叫んだ声に反応してフロンが背後を振り返る。その瞬間、生き物の存在を感知したクネクネ草が、敵意をむき出しにして、進行方向に居合わせた蛙に襲いかかった。

「うわっ！」

小さな体が抗う暇もなく、クネクネ草はあっという間にフロンに巻きつく。

「フロン！」

ミルテは咄嗟に地面を蹴り、フロンに手を伸ばした。

柔らかいお腹を締め上げようとする草の先っぽを掴み上げる。すると今度はミルテを標的に決めたのか、ツルのような見た目の草は、蛙の体を離し、ミルテの腕に巻きつき始めた。

「ぐえっ、げほっ」

地面に落ちて足元で喘ぐフロンの声は苦しそうだが、ひとまず命に別状はなさそうだ。

それに少しホッとしつつ、ミルテは肩からさげた鞆の中に、自由

がきくもう片方の手を差し入れた。目当てはもちろん、灰の入った小袋だ。

しかし、袋を取り出そうとしたところで、腕を無意識のうちに上げてしまったらしい。柔らかな首筋に触れたクネクネ草は、再び標的を替え、ミルテの首に移動し始めた。

「きやあつ！」

背筋にぞわぞわとした恐怖が走る。生理的嫌悪感と、命の危険に対する緊張感とがない混ぜになった恐怖が。

ふっと足から力が抜け、地面の感触がお尻に当たる。続いて横腹に柔らかいもの――花を下敷きに倒れたのだとわかる。

締め付けようとする草から氣道を守ろうと、ミルテは必死に草と首との間に指を差し挟み、力を入れた。

「ミルテ！」

フロンの声がどこか遠くに聞こえる。

薄青色の花は、上にあるはずの空をひっくり返したようで、甘い香りとあいまって。

（天国みたい――）

そんなことをふと思った時、ぺとつとしたものの重みを頬に感じた。

「これでもくらえっ！」

なんだろう、とぼやけてくる頭で考えたのも束の間、何か粉みたいなものを肌を感じ、首の苦しさが突然消え失せた。

「え……？」

驚いて目を見開く。それでも視界を埋め尽くすのは花の青と緑と、それに続く空の青。幻想的な光景に一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなる。

やっぱりここは空の上かも……と思った時、琥珀色の輝きがひよっこりと現れた。

「大丈夫か？」

氣遣わしげに覗きこんでくるものが蛙の顔だとわかり、びくつと

身がすくむ。

しかし、すぐに恐怖はさざ波のようにひいていった。
よく見たら綺麗かもしれない、この瞳。太陽が当たらなくても、
星のようにきらきらと静かに瞬いている。

「どう……」

して、と続けようとしてまだ喉に震えが残っていることに気づく。
うまく声が出せない。

それを察したのか、フロンは一度視界から消え、次に現れた時は
何かを口に咥えていた。

見覚えがある。灰の入った小袋だ。

確か取り出そうとして手から落とした記憶がある。それをフロン
が拾ってくれたらしい。

「こいつは灰をふりかけると大人しくなるんだろ？」

物知りの蛙だ、とミルテは改めて思った。

その知識も魔女に使役されていた時代に培ったものなんだろうか。
なんにしろ、おかげで助かった。

「ありがとう、フロン」

戻ってきた力でどうにか笑みの形を作る。

「そいつはお互いさまだな」

ぐねつと目の下まで歪んだ口が、まるでにやりと笑っているよう
に見えた。

「ふう……もつと慎重にならないとダメね」

身を起こしたミルテは、ぴくりとも動かなくなったクネクネ草を
紐で縛り、鞆の中に押し込めた。

一度灰をかけられたクネクネ草は、三日は大人しくしている。そ
の間にさつさと火にくべたいところだ。

燃えつきた後に残る黒い繊維質なものが、指紋や髪の毛などの痕
跡から相手を探し出す“追跡の縄”の材料になるのだ。

「確かに、あんたは少しおっちょこちょいだな」

フロンの冷静な評価がぐさつと胸に突き刺さる。

事実とはいえ、他人——ましてや蛙にずばりと欠点を指摘されるのは、自分で自分を卑下するのとはまた違った痛みがある。

「さつきも、あんたが手を出さず、すぐに灰をかけてればあんな惨事にはならなかっただろうにな」

「だつ、だつて、フロンが死んじやうと思つて、慌てちゃつて」

見苦しい言い訳だとはわかっていても、言い返さずにはいられなかった。

本当に、あの時はフロンから草を引き剥がす以外のことは、ちらとも頭に浮かばなかったのだ。

「わかつてる。だから……」

ぴよこん、ぴよこん、とフロンが地面に膝をついたミルテの正面にやつてくる。

「だから」の後を言いよんどる風に少しもじもじとし、それからミルテの顔を見上げ、

「ぶつ、なんだその顔！」

いきなり噴き出した。

ミルテはハツとして鞆から手鏡を取り出した。嫌な予感がする。そして予感的中した。

「やだあああ！」

ひどいものだ。片方の頬から首にかけて灰で真っ白になっている。髪はくしゃくしゃ、花びらや葉っぱがくつついて、寝起きより荒れ放題。まるでできそこないのピエロだ。

「顔洗いたいっつ。でもお水がないっつ」

「俺の瓶の水を使ってもいいぞ」

「やだ、そんな蛙エクスがしみこんでそうな水！　ぬめってしてそう」

「なんだとう！　何気に失礼なやつだな！」

「くすん。おうちに帰ってから洗うしかないわね」

鞆から取り出したハンカチで、とりあえず応急処置的に頬をぬぐ

う。

まだなにやらぎゃーぎゃーと文句を言っているフロンの言葉は聞き流して、髪を結びなおし、やおら立ち上がった。

「もう、さっさとモジモジ草を見つけて帰りましょ」

陽はまだ高いが、とつくにおやつ時間は過ぎているはずだ。空が茜色に染まりだすのももうすぐだろう。

「それには異存ないな。俺も一緒に探すぞ」

と、何故か意気揚々と、フロンが前に飛び出した。

「え？ フロンも一緒に？」

「ああ。二人で探すほうが早いだろ？ モジモジ草の特徴を教えてください」

「いいけど……結構、探すの難しいわよ。モジモジ草は亜種が多いから」

「あんたに探し出せるんなら俺にも探せる」

「むかつ。どうせ私は落ちこぼれですからね！」

ミルテは唇をとんがらせた。

いいところもあるなあ、と見直した次の瞬間には、憎まれ口を叩かれ、いつまで経っても“嫌なやつ”という印象が薄れない。

しかし。

「いや、そういう意味で言ったんじゃ……」

珍しく、フォローしようとしているのか訂正してくれたので、ミルテはあっさり機嫌を直すことにした。

フロンの前に再び膝をつき、

「モジモジ草の特徴はね……蜂蜜に近い黄色の花びら。蝶々みたいな形の葉っぱが根元にいっぱいついてて、その中からひよろりとした茎が伸びてるわ。触るとモジモジって動くの。だからモジモジ草っていうのね」

説明すると、フロンはこくりと頷いて、辺りを見回した。そして、ため息の代わりか、「ゲロ……」と弱々しい鳴き声をあげた。

無理もない。黄色はこの花畑で最も多い色だ。

それでも果敢に黄色い花が咲いている場所にびよこびよこと移動し、早速ひとつひとつの花を注意深く観察しだす。

その様子がなんだか可愛くて、ミルテは口元をほころばせた。形を確かめようと、葉っぱの上に飛び乗り、その場でちょんちょんと飛び跳ねながら数回まわる。

それから顔を上げ、花をしげしげと眺めた後、おもむろに次の花へと飛び移る。

まるで陽気なダンスでも躍っているかのようだ。蛙のダンス。

ファンシーな光景ににまにま笑っていると、不意にフロンの顔がこちらを向いた。

「おい、これじゃないか？」

呼ばれて、ミルテは「え？ もう？」と立ち上がった。こんなに早く見つけたのならたいしたものだ。

しかし、フロンのもとに歩み寄ると、残念ながらその花は期待のものとは違っていた。

「確かにそれは葉っぱが蝶々の形をしてるけど違うわね。花の色がどちらかというレモン色でしょう？」

「そうか？ じゃあ、こっちは？」

「それも違うかな。オレンジ色が強すぎるから」

「じゃあこれだろ！」

「残念。それはすごく良く似てるけどシオシオ草」

フロンが飛び移った花は、ミルテの鑑識を証明するかのように見える萎れていく。

フロンも一緒にみるみる萎れていった。

「じつと観察するのも目が痛いし、この体じゃやっぱり辛いな」

「無理しないで。ちゃんと私が見つけてあげるから。それでも目はいいほうなのよ？」

疑わしげに見上げてくるフロンにつこりと笑みを返し、ミルテは周囲を見渡した。

どの花も、太陽の光を少しも漏らすまいと、己の存在を主張する

かのように花びらを広げ、生き生きと輝いている。

ミルテは眩しさにくらまないよう目を細め、慎重に、あやまって踏み潰さないよう、慎重に足を運んでいった。

一見、どの花も同じに見えるが、細かな違いがミルテの目には瞬時に映る。

探しているものを頭に思い描くと、それがどんなに似ているものでも、僅かな違いを感知して自然と目が逸れる。

本物でなければ響かないのだ。心に。

ゆっくりと黄色い花畑の中を進みながら注意深く首を巡らす。フロンが横をびよこびよこついでくる。

一番近くの花畑を探し終わり、草むらをまたいだ向こうの花畑に移った。

こちらもお広大だ。大きなお邸の庭でもこれほど広いところはなかなかない。さすがに疲れて、ミルテは目を閉じ、一度ゆっくりと深呼吸した。

「今日中に探し出すのは無理なんじゃないか？　少し休んだほうがいい」

フロンが意外にも優しい言葉をかけてくる。

「ん……でもあと少し……」

弧を描く花畑の外郭をなぞるように歩きながら、再びモジモジ草探しに集中する。

「こんだけ同じような花が咲き乱れてるんだ。しかもやたらキラキラ光ってるし。そうすぐには見つからない」

「あつた！」

ミルテは大きな声でその花のもとに駆け寄った。

見つけた瞬間、胸に微かな鈴の音が鳴り響く。それが周囲の景色から浮き上がり、ひととき強い存在感を放って見える。いつも表れるその感覚が、今もしっかりと感じられた。

「これよ、フロン。これがモジモジ草」

いま証拠を見せるから、と指先で蜂蜜色の花びらに軽く触れると、

太陽に顔を向けていた花はまるで恥らっているかのようにそつと首をもたげた。

羽根を広げた蝶の形をした可愛らしい葉も、手の平を合わせるかのように縮んで葉先をすり合わせ、風もないのに小刻みに揺れる。まさにモジモジだった。これ以上ないってくらいにモジモジだった。

「へえ……なるほど。これが……。すごいな。よくわかったな」

「ふふ。慣れてるからね」

「でも俺には他との違いが全然わからない。それも魔女の力なのか？」

「ううん。これは単なる勘。ピンとくる、ってやつ。ぴったりはまるパズルのピースを見つけた時と同じかんじで……って蛙にはわからないわよね、そんな例え」

「いや、わかる。要するに、これはミルテの特技なんだろう？」

ミルテ、と呼ばれたことに驚いた。

思わず手を止めてフロンの横顔に見入るが、そういえばさっきも呼ばれたな、と思い出す。

あの時は「あんた」という呼び名はそぐわない状況だったから気にしなかったが、今は違う。フロンは無意識に「ミルテ」を選んだ。

「……なんだ？ 変な顔して」

「ん……ううん、なんでもない」

せつかく和やかなムードなのだ。水を差すのはもったいない。

「まあ、どんなやつでもひとつくらいは取り得があるってことだな」
がくつ。

「やっぱり落とすんじゃない！ 意地悪！」

「いじわ……これでも一応褒めたつもりなだけだな。被害妄想が強すぎるんじゃないか？」

「ええー？ 今の褒め言葉？ 全然そうは聞こえなかったけど」

「だから……あゝったく面倒だな！ つまり、あれだ。落ちこぼれと言ったのは取り消す」

「え？」

布に包もうとした花がはらりとこぼれた。

「素材を正確に見つけ出せるのもひとつの才能だ。それは魔女として誇れることだろ？ あんたにもこんな才能があるんだから、あんまりどうせ自分は、とかつていじけるな」

（フロンが……謝って、褒めてくれてる？）

しかも、随分と優しい言葉で。

ミルテの視線を避けるように横を向いた蛙は、今度ははつきりと赤色に染まっていた。

冷血動物が赤くなるなんて聞いたことがない。やはりフロンはどこか特別だ。

不意に、そんなどうでもいいようなことがぼんやりとした頭に浮かぶ。

（興奮すると色の変わる動物ってのもいたわね。フロンもそうなのかしら？ でもあれって攻撃色だったような……）

そういえば、魔法で蛙になった人間は、自然の蛙とは少し違ってどこか人間の特性を残していると聞いたことがあるが。

（……まさかね）

きつとフロンは感情が昂ぶると色の変わる珍しい種なのだろう、とミルテは適当に結論づけた。

今はきつと……そう、多分、照れている。

「フロン」

「なんだ？」

「私、頑張って薬を作るわね。フロンの恋を応援したいから」

「無理するな。薬を作るのなんて本当は嫌なんだろ？」

「ううん。信じてるもの。フロンは好きな人が悲しむようなことはしないって」

「……それは……」

「だからフロンのこと、友達だと思ってもいい？」

「——っ!？」

自分でも不思議だが。

ミルテはいつのまにかこの意地っ張りで傲慢で口が悪くて、
だけど照れ屋で優しい蛙のことを、もっと知りたいと思っていた。

蛙は大の苦手だったはずなのに、フロンなら触るのももう平気な
気がする。

(……って、ちょっと現金かしら)

「フロンが魔女はダメだって言っても、私は友達だと思わせてもら
うけど」

空が、フロンと同じ色に染まりだす。

ピッツと背を向けたフロンの心と同調するかのように。夜を迎え
る直前のその輝きはミルテにもありがたかった。きっと、自分の顔
色も燃える空に溶け込んで目立たない。

慰めではなく、認めてくれた。魔女としての才能をおよそ初めて、
認めてもらえた。

……蛙だけど。

「……勝手にしろ」

まだ意地を張る蛙に笑みをこぼしつつ、ミルテは静かに高まって
いく鼓動を抑えるため。

(ありがとう、フロン)

そっと、胸に手を当てた。

後編

とつぷりと日の暮れた夜の森は、闇の色をかかえ込み、不気味な静けさに包まれている——かというと、そうでもない。

ピールルル、ピールルル、ピールリツ。

「……なあ」

キヨキヨキヨキヨ、ピール、ピール。

「なあに？」

ピールリ、ピールリ、ウキヨキヨキヨキヨ。

「あんたはよくこんなところに住んでいられるよな？　実は俺、寝不足気味なんだが」

うんざりとした様子でテーブルの上に待機しているフロンがこぼす。

同じくテーブルに置かれたランプの火がでこぼこな体に陰影を作り、悲愴さを演出するのに一役買っている。

「こんなところだから私みたいな落ちこぼれが住めるんじゃない。

たいして珍しいものは採取できないけど、こんなに綺麗で平和な森だもの。普通ならもつと人気の場所なのよ」

必要な材料の入った壺をテーブルの上に出しながら、ミルテは苦笑と共に言った。

“歌い森”という呼び名は伊達ではない。この森にやたら大量に住む通称“酔漢鳥”と呼ばれる青い小鳥は、太陽の下のみならず、月の下でも、いや曇りでも雨でも、年がら年じゅう、ひっきりなしに歌い続けているのだ。

この森に居を構えようとした歴代の魔女達は、こぞって不眠症と耳鳴りに悩まされ、森を去ることを余儀なくされた。

そして本来なら力ある魔女が、珍しいものが採取できる、人里が近い、景色が美しいなどの人気の高い場所を独占してしまうものな

のだが、馬市の中のじゃじゃ馬のごとくこの森は売れ残り、ミルテのような落ちこぼれが住んでも誰にも文句を言われないという、ありがたいような、そうでもないような現状を手に入れることができたのだ。

「あんたは平気なのか？ この騒音」

「私、あんまり音とかがって気にならない人なの。騒がしいって言っても、可愛らしい小鳥のさえずりだし」

「そりゃぱつと聞きは可愛らしいかもしれないが、このやかましさは度を越してるだろ」

「そう？ そんなにやかましい？」

「……意外と図太い神経してるんだな」

段々慣れてきた褒め言葉とも皮肉ともつかないフロンの言葉は軽く聞き流し、ミルテは両手をパンと叩いて空気を変えた。

「さ、これでケロケロポーションに必要な材料は全部揃ったわね。」

「じゃあ、調査を始めましょっか」

調査用の大きなテーブルの上には、フロンのつかっているレシピ集を始めとして、モジモジ草など、もろもろの材料と道具類が並べられ、準備完了となっていた。

「ケロケロポーション？ なんだそりゃ」

「蛙変身薬、なんて捻りもなんにもないし、固すぎるでしょ？ ちよつと可愛いかんじにアレンジしてみたの」

「てへ、と笑ってみせると、」

「確かにゆるいかんじになってるが、だからって調査の手をゆるめるなよ」

呆れたような半眼で釘を刺してくるフロンの。

「うまいこと言っわね」

「こんなことで褒められても嬉しくもなんともない」

軽い応酬に緊張をほぐし、レシピ集に改めて目を通す。

「まずは鍋に月光水コップ二杯分を入れ、森火にかける、と。大きさは小鍋でいいわね」

魔女の鍋は一応、大、中、小の三種類、用途別にあり、魔女市に
いけば、大抵三つセットで売られている。そこそ高い。

物に燃え移らない不思議な深緑の火、森火を焚くための薪は、バ
オバブルーという木から作られたもので、これまた魔女市で入手で
きる。わりと安い。

石窯にバオバブルーの薪を入れ、一人分の調理鍋といった大きさ
の黒い鍋を上置き、擦ったマツチを薪の中に放り込む。

「テロール、テリオール、ブームブーム・オクス」

絶対に必要というわけではないが、燃え上がるのが早くなるので、
森火を焚く時は儀式的にこう唱える。

意味は、古代の魔女の言葉で“ホウキを手に踊れ、愛しき森の火
と共に”。

特に空気を送り込まなくても、バオバブルーはひとりでに火の手
をあげていく。

マツチの赤い炎は既に消え、透きとおった緑の炎がちろちろと鍋
の底を熱し始めた。

「テロール、テリオール、ブームブーム・オクス」

歌うように唱えながら、モジモジ草の入った袋をつまみあげる。

ここからが真の調合だ。

「なんか楽しそうだな」

リズムに合わせてタクトのように指を振るミルテを見上げ、フロ
ンが言う。

「もちろん。調合は楽しみながらやるものなのよ。呪文は全部、歌
みたいになってるし。昔は魔女が調合を始めると、森の動物たちが
踊りだしたっていうわ」

古き良き時代の魔女たちは陽気で優しく、動物からも人からも好
かれ、敬われていた。

魔女が陽気な種族でなくなったのはいつからなのか——ふと、そ
んなことを思う。

悪さをする魔女が増え、魔女の評判もがた落ちしてしまった今。

滅び行くさだめなのかもしれない。古き血の種族など。

自然淘汰、というやつなのだろう。

それに抗っても仕方ない。なるようになれ。せめて生きてる間は楽しくいこうじゃないか。人生を豊かにするために――調合は、そんな気分に合わせてくれる。

「モジモジ草をひとつまみ。すりつぶしたアモスの実をぱらぱら。緋喰い鳥の羽根でちよっぴり辛くなったなら、チクリ蜂の蜜で甘味も添えて♪」

次々と材料を鍋に落としていく。

ぽこぽこと水色の液の表面が泡だってきた。

「熊耳草もおひとついかが、蛙の油ですべすべに……って、あっ！　そういえば、蛙の油！」

突然、思い出してフロンを振り返る。

必要な材料のひとつである蛙の油の調達をすっかり忘れていたのだ。

「そついやそうだったな」

フロンも今思い出したのか、ぼそりと言う。

「フロン、心の準備はいい？」

「なんのための準備だ！　絞り取るのは却下だからな！」

真剣に怯えた声で怒鳴られ、冗談なのにとぶつぶつこぼしながら、ミルテは本棚に向かった。

素材の採取方法を示した本を手に取り、ぱらぱらとページをめくる。

「蛙の油、蛙の油………あつた、これね」

意外とあっさりと見つかった。が。

「えーと……蛇に睨まれた蛙から採取……って、無理！　それは無理！」

蛇なんて冗談じゃない。思わず本を投げ出しそうになる。

「まあ待て。要するに肝を冷やせばいいんだろ？　本物の蛇がなくてもなんとかなるんじゃないか？」

フロンの言葉に、なるほど、と手を打ち、ミルテは床の籠に移しておいた今日採りたてはやはやのものを取り出した。

「どう？ 蛇の代わりに」

持ちやすいよう幾重かに巻き、紐で縛ったままのクネクネ草をフロンの目の前に突きつけると、

「確かにこいつには肝を冷やされたが……今はもう動かないし、怖くもなんともないな」

そっけない返事を返される。ミルテは「まあそうよね」と頷いた。クネクネ草をもとの籠に戻そうと踵を返す。その時、突然、手の中のクネクネ草がもぞりと動いた。

「きゃあっ！」

今日、存分に嫌な思いを味わったばかりである。背筋にぞわっとしたものが走り、ミルテは咄嗟にクネクネ草を放り投げた。ボチャン。

それがどこに落ちるかなど、まったく考えもしなかった。仮に考えたところで、そんな最悪なところに落ちるとは想像もつかなかっただろうが。

そういうわけで、クネクネ草は見事、鍋の中に落下した。

「なああああ——っ！」

フロンの叫び声は、後半からかすれて音にならなかった。

慌てて鍋にかきまぜ棒を差し入れ、湯気をあげるクネクネ草を拾い上げる。

時間にして数秒といったところか。

茶色のままの草に溶けた様子はないが、しかしどんな反応が起こったのか、鍋の中の水色だった液体は、黄色と黒の怪しいマールブル模様に変わっていた。

「ま、まずいかしらこれ。でもすぐに取り出したし……」

「あ、あ」

口を大きく開けて、呆然としているフロンをちらりと見やる。と、
(あ、油！)

フロンの喉元から、何かが滴ろろとしていた。ミルテは素早くテーブルの上に手を伸ばし、計量スプーンを取り上げた。

すぐさま振り返り、なんとなく生臭そうなその液体を、フロンの喉を掻き切る勢いで猛然と突きつけたスプーンの中に収める。

これが蛙の油——確かに油色だ。なんだかすごいお宝を手に入れるような気分になる。興奮に汗ばむ拳をフロンに向けて熱く叫ぶ。

「やったわフロン！ 蛙の油よ！」

「それどころじゃない！　今のつ、今のはどう見ても……」

「さあ、ちゃちゃつと残りを仕上げるわよ！」

「聞けえええええ！」

重い、重い沈黙が続いていた。

ミルテとフロンは同じ目の高さで向かい合い、じつと二人の間にある物を見つめていた。

窓から射し込む月の光を吸い込むようにキラキラと、輪郭が優しい輝きを放っている。

なのに透明度を増さない中身は、妖しい煙すら立ち昇ってきそう
な禍々しさで――。

テーブルの上に佇むガラスの薬瓶は、濁った赤紫色の液体をかかえ込んでいた。何故か最終的にこの色になったケロケロポーシヨン（？）である。

どちらともなくゴクリ、と喉を鳴らす音が響いた後、ミルテは沈黙を破るように溜まった息を吐き出し、そして、力強く言った。

「成功ね！」

「失敗だ！」

電光石火の突っ込みだった。

「現実を見つめろ、ミルテ。本には、薬の色は何色になると書いてある？」

「青紫」

「目の前にある薬は何色だ？」

「赤紫……。あ、あはは。わりと近いんじゃないかしらゝなんて……」

「大違いだろ！　どこからどう見ても文句のつけようのない失敗作だ！」

「それでも精一杯頑張ったのよ、フロン。そんなに怒らないで」

「しょんぼりとうなだれ、イジケまなこでフロンを見上げる。紫の蛙は何故か、たじつと怯んだように一步下がり、

「わかった。悪かった。確かにあんたはよくやってくれた。だからそんな眼で見るな」

「まだ泣いてないわよ？」

「いや、そうじゃなくて……。くそつ、こんな体でなけりや……。なにやらブツブツとこぼしている。

「うまくできなくて本当にごめんなさい」

「だから、もうそれはいい。クネクネ草が致命的だったんだ。あれは不可抗力だった。あんたの力が足りなかったわけじゃない」

「もう一度作ってみるから！」

「……いや。もういいんだ」

突然、力をなくした声に、ミルテは引き寄せられるように顔を上げた。

目玉の飛び出した小さな生き物のシルエットが、半分だけ月光に照らされ、ぼんやりと闇から浮かび上がる。

蛙の虚ろな瞳には、はつきりと諦めの色が滲み出ていた。

「どうして？　好きな人はどうするの？」

「もともと無理な話だったんだ。この薬が完成したところで、即座に願いが叶うわけじゃない」

「諦めないで！　まだ告白もしてないんでしょ？」

「告白か……。それこそ不可能だな」

「そんな弱腰でどうするの！　私にできることならなんでもするから！　とにかく、一度その人と会ってみましょう！」

勢い込んで立ち上がる。

こうなったら乗りかかった船、というわけでもない。

あの気位の高くて強気なフロンがそんな風に萎れているのが見て
いられなかったのだ。

「会うなんて冗談じゃない！」

しかし、フロンは勢いよくぴょんと飛び跳ねる。心臓が口から飛
び出したかのような慌てっぷりで。

「どうして！」

ずいっと顔を覗きこむと。

「う……その、なんだ。俺はこんな蛙だから……そう、多分、気持
ち悪がられるじゃないか。そんなのシヨックだろう？」

しどろもどろに答える。

（そんなにその人のことが好きなのね……）

自分の姿を見せたくないほどに。

少し妬ける気がした。

「わかったわ。いきなりご対面、はやめて、ゆっくり段階を踏んで
いきましょ」

すっかりお見合い仲介役になりきったミルテは、ひとさし指を立
て、作戦を説明する参謀といった面持ちでフロンを見据えた。

「まずは私がその人に会って、お友達になるわ。それから好みとか
聞き出して、フロンに教えてあげる。あとはあなたの努力次第。適
当なタイミングを見計らって紹介してあげるから、うまくやるのよ」

「なんでそんなに張り切ってるんだ……」

「フロンの恋を応援するって言ったじゃない！ 実るまでいかなく
ても、せめて好きな人の傍にいれるようにしてあげるから！」

ミルテは熱のこもった眼差しをフロンに向けた。

薬ができなかった以上、自分に手伝えることはこれぐらいしかな
い。フロンをがっかりさせた責任はどうしてもとりたかった。

しかし。

「余計なお世話だ。あんたにそこまでしてもらう義理はないし、あ
んたには無理だ」

何故か急に機嫌を悪くしたフロンは、プイツとそっぽを向いてそんな冷たいことを言う。

ずきん、と胸が痛んだ。

見放された——そう思った。

「確かに、私は落ちこぼれだけど……」

いつのまにか滲んでいた涙が、頬を伝う。

声が震えないよう、必死に気張ろうとしたが無駄だった。

「フロンの役に立ちたいの。だって、私にもっと魔力があったら、フロンを人間にしてあげられるのに。こんな簡単な薬すら失敗して……。私、自分がダメ魔女だってこと、こんなに悔しかったことない」

言いながら、ぼろぼろとこぼれだす涙を、もうどうしようもできなかった。

「こんなんじゃ、魔女なんて言えない……」

困った人を助けるのが魔女の仕事なのに。なにひとつ満足にできない自分。

一人前の魔女に生まれたかった。魔女であることに揺ぎない誇りを持ちたかった。

魔法使いになりたい気持ちがわかるなんて、ネアに言ったこと、あんなの嘘だ。本当は魔女に生まれてきて、自然と共にある優しい血を持てて、心から良かったと思っている。

だから誰かの役に立ちたい。フロンの役に立ちたい。

自分を落ちこぼれじゃないと言ってくれたフロンの助けになりたかった。なのに……。

「なっ、泣くなおい！　今のは言い方が悪かった！　そういう意味で言ったんじゃない」

「ううん、いいの。本当のことだもの……」

ぎよっとして気遣ってくるフロンに、ますます申し訳ない気持ちになり、涙をぬぐいながら首を横に振る。

すると、ぺたんと湿った音が微かに響き、喉の奥に絡まったよう

な声が近づいてきた。

「悪かったよ。俺はどうも言葉の使い方が下手で……。研究一筋だったから、基本的に人と話すのが苦手なんだ」

「フロンは悪くな……。へ？ 研究？」

「ぱちくり、と目が瞬く。涙が止まった。」

蛙の研究って、一体なんだろう？

「は、ハエの研究とかな！ それはともかく、俺も少し弱気になりかけてた」

恥ずかしそうに色を変えた蛙は、ミルテを真下から見上げて続ける。

「あんたにはきつい仕事になるかもしれない、って思ったんだ。それでもよければ、やってくれるか？」

ハッとなって蛙を見返す。

「俺には、すぐれる人はあんたしかいない。ミルテ、あんたの力が必要だ。落ちこぼれなんかじゃない、一人前の魔女であるあんたの力が」

その真摯な響きに、どきん、と胸が鳴った。

これは依頼だ。フロンは今、正式に魔女への依頼をしてもらっているのだ。

「やるわ。私にできることならなんでも」

「あんたにしかできない」

あんただからできるんだ。そう付け加わった後に、湿っぽい、だけれどどこか温かい、ぺとりとした手がミルテの指先にかかる。いつのまにか触れられる距離にフロンがいた。

「とりあえず、あんたのその作戦でやってみよう。まずあんたが近づいて知り合いになる。それから隙を窺い、チャンス待つ」

「ぷっ、なにその戦いにいくみたいな言い方。もっと恋の駆け引きっぽく言ってよ」

思わず噴き出し、声をたてて笑った。

ふっと一瞬表情を緩ませ、しかしすぐに引き締めなおしたフロン

が、ミルテの指にのせた手に力をこめてくる。

「正直、心配事は色々あるが……何があっても、全力で俺が守る。必ず」

大げさねえ、と笑いながらも、その言葉をどこか頼もしくも、まったくすぐたたくも感じている自分が不思議だった。

どうやら、思っている以上にこの蛙のことが好きなのかもしれない。

「はあ、はあ、だ、だいぶあんたの暴走飛行にも、な、慣れたぞっ」
息切れする声は、腰の皮袋からこぼれてくる。まるで袋が喋っているようで不気味だが、もちろん、フロンが入っている。

といっても、直接袋の中にいるのではなく、昨日と同じ瓶に入ったフロンを袋に包んで隠しているだけなのだが。

どうしても姿を見られたくないと言うフロンの頼みを聞き入れた結果だ。

「失礼ね」

まるで暴れ牛でも乗りこなしたかのような口振りにミルテは頬を膨らませたが、猿のような恰好でたわんだ枝にしがみついている今の状況では、何を言っても説得力がない。

今回の着地は、確かに、ほんの少しだけ、危なかった。

「あの窓から見えるのね？」

ミルテはすると幹に移動し、この位置からではまだ中の様子が見えない下方にある窓を首で示した。

家、というよりは塔そのものである。初めて見た時は驚いた。

なんと、フロンが恋した相手は魔法使いで、この塔に住んでいるのだという。

ミルテの森からかなり離れたところにある大きな森の中に建てられた石造りの塔だ。城砦を思わせる堅牢な三階建て。その最上階は研究室となっており、恋しい人の姿はその窓から覗けるだろうということ、こうして近くの木に着陸(?)したのである。

ちなみにホウキは小さくしてポケットにしまった。魔女のホウキは念じれば大きさを自由に変えられる。

幹を伝い降りるに従い、窓辺に置かれた机やら、何かの器具やら本やら、確かに研究室らしい内装が徐々に見えてくる。

部屋の中央辺りに、実験用が一際大きなテーブルがあり、その傍らに人の手が現れた。ハツと下の枝に伸ばしかけた足をひっこめる。気づかれたら言い訳できない不審者ルック全開中だ。幹に身を隠すようにして慎重にずり下がっていく。幸いにも今日はズボンだ。

やがてその全貌を現したのは、腰まで伸びた緑がかかった黒髪をひとつに束ね、ゆったりと椅子に背をもたせかけた美しい——青年だった。

「フロン……男の人なんだけど……」

ごくり、と何故かある種の緊張と共に生唾を飲み下し、腰の蛙に問いかけると。

「俺は……、オスが、好きなん、だっ」

意を決したかのような、なんだか投げやりに腹を括ったかのような絞り声が重々しく空気を凍らせた。

「……フロン。私はなにがあっても友達だから……」

「いいからさっさとどんな様子が教えろ！」

「えっとね、椅子に座って大きな鏡を磨いてる。男の人なのに綺麗ねえ……」

青年は遠目から横顔だけ見てもはつきりとわかるほど美形だった。これなら男だつて一目惚れしてしまうかもしれない。

線が細いというわけではないが、肌が白く、眉や鼻の形が整っており、目には知性の輝きがある。ゆったりとした青灰色のローブに身を包み、膝に凝った意匠の鏡を立て、大事そうに布で磨いているナルシストなのだとしたら少し残念だ。

（鏡？　そういえば最近、鏡の噂を聞いたような……）

「よし、いいだろう。研究室を見せてください、と言ってそこに通してもらうんだ」

「わかったわ」

木から降りたミルテは、早速塔の入り口の扉を叩いた。しばらく待つと、ギィ、とものものしく扉が開く。

さつきしげしげと観察していた本人が現れ、一瞬後ろめたさを覚えるが、どうにか真摯そうな顔を取り繕って言う。

「こんにちは。私、魔法使い志望のミルテといいます。将来のために、色々とお話を伺ってもいいですか？」

研究室を見せてください、という希望通りに最上階へと案内してくれたその青年は、

「魔法使いのソル・アルマンといいます」

と優しい声で自己紹介をした。

魔法使いは高飛車というイメージはすぐに吹き飛んだ。断られたらどうしようかと思っていたが、そんな心配は無用だったようだ。

「それで、どんなお話をお聞きたいのですか？」

心地良い低さで響く声と、甘い微笑をたたえたマスクについぼんやりしてしまう。

「あ、あの、ま、魔法使いの仕事や研究って、どんなかんじなんですか？」

こんなに若くて美しい青年と話をした経験のないミルテはすっかりあがっていた。

「そうですねえ……」

机の引き出しから書類の束を取り出し、最近依頼された仕事は…

…と説明してくれる青年の薄い頬に、森を包む深い闇の色をした横髪が落ち、意外と男性的な首筋を露にする。

段々と、胸の動悸が激しくなってきた。

青年の顔を直視していられなくなったミルテは、落ち着かない視線を周囲に泳がせた。

部屋のレイアウトは自分の調合部屋と似たようなものの、こちらはかなり広く、整理整頓がなされている。

天井にまで届く本棚を埋め尽くす書物は、なになに理論とか難しそうなタイトルが並び、蔵書の数もミルテの優に数十倍はあると思われる。

その上、本棚に入りきらなかったのだろう本が中央に置かれた実験台の上にも積み重ねられているのだから、魔法使いが英知を極める職業だといわれているのも納得がいく。

少し目に眩しいのは、部屋が全体的にうつすらとした光の膜に覆われているからだ。恐らく、防御と保存の魔法。窓辺の机の上にはさきほど青年が磨いていた鏡が寝かされ、キラキラと陽の光を反射していた。

外から覗き見たままの光景の場所に立っているというのも妙な気分だ。

「ミルテさん？」

「は、はいいいっ！」

不意打ちの呼び声に意識を引き戻され、思いつきりひきつった声をあげてしまった。

側面に体当たりしたのか、腰の瓶からフロンの突っ込みっぽい振動を感じる。

「ご、ごめんなさいっ、私、お、男の人にあんまり慣れてなくてっ、青年と腰の蛙と、両方へのいいわけだ。」

「はは……そんなに緊張しないでください。それでも一応紳士のつもりですから、いきなり無礼なことしたりはしませんよ？」

ますます頬が熱くなる。

ソル・アルマンはとて穏やかで、親切で、フロンが好きになるのもわかる気がした。

（この人なら、フロンを見ても嫌ったりしないわ、きつと）

それどころか、蛙と友達になるのも快く承諾してくれそんな雰囲気である。

少々性急かもしれないが、フロンのことを話してもいいのではないだろうか。

「あの……ソル・アルマンさん」

「はい？」

意を決してミルテは切り出した。

「突然のお話なんです、苦手な生き物ってありますか？」

いきなり質問が遠回りすぎるだろうか。いやいやでも好みは大きな問題だ。

「いえ、特にはありませんよ。生き物は好きですから」

脈ありっ！ 握った拳が熱くなる。

「は、爬虫類とか両生類とかでも大丈夫ですか？」

重ねて慎重に訊く。するとソル・アルマンは柔らかに顔をほころばせて、

「蛇やトカゲや蛙はむしろ好きな方です」

と答えたのだ！

第一関門突破ああああ！

思わず拳を突き上げそうになり、慌てて姿勢を正したミルテに、ソル・アルマンが不思議そうに尋ねてくる。

「どういったお話なんですか？」

これはいけるんじゃないだろうか。きつといける気がする。

「あの、もしよければなんですけど」

続けようとしたが、その時、腰を瓶越しに強く叩かれた。

「いいじゃないフロン！」

やってしまった、と思った時はもう遅い。

ソル・アルマンの視線はしっかりとミルテの腰から提げられた袋に集中していた。

「中に、何かいるのですか？」

穏やかな声で問いかけられる。

こうなったら本当のことを話すしかないだろう。ミルテは決心した。

陰しく瓶を叩く蛙の怒りはごもつともだが、どうせいずれ顔は見せなければいけないのだ。それなら、最初から見せたほうがいいに

決まっている。

「あ、あの、実はあなたとお友達になりたいという生き物がいます」

「生き物？」

「えっと、少々生々しい生き物なんですが、ちょっと待っていてください」

腰帯から皮袋を取り外し、首を傾げる青年に背を向けながら中の瓶の蓋を開ける。

ひよいと覗きこむと、怒りに煮えたぎった目で睨みつけてくるフロンがいた。

「ね、フロン。きっと大丈夫。そんな怖い顔しないで。この人ならあなたと友達になってくれるわ、絶対」

「興味深いですね。是非その生き物を紹介してください」
ソル・アルマンがやってくる。

予想通りの好反応を示してくれる優しい青年に、ミルテはすっかり全てを打ち明ける気になっていた。

にこにこ歩み寄ってくるフロンの想い人のもとへ、袋ごと瓶を両の手の平に包みこみ、ゆっくりと手を差し出す。

親しげな瞳が瓶の中を覗きこむ。その瞬間、信じられないことが起こった。

「ゲロロッ！」

勢いよく飛び出した紫色の物体が、端正な顔にべとっと貼りついたのだ。

「わっ！」

驚いて仰け反るソル・アルマンの鼻を踏み台にして、再び大きくジャンプしたのはフロンだ。手近な椅子の背もたれに飛び移り、ものすごいぴよこぴよこ速で逃げていく。

啞然。

あれは蛙流の求愛行動なのだろうか。それとも照れているのだろうか。

それにしても随分と必死そうな小さな背中を見守っていたミルテだったが、ハツと我に返り、ここはフォローするべきかと青年のもとに駆け寄った。

「大丈夫ですか、アルマンさ……」

「おのれ、やはりお前だったのねソル・アルマン！」

へ？ ソル・アルマンはあなたでは……てゆーかオカマ？ と浮かんだ疑問は、青年の目に漲る殺気を見た瞬間、霧散する。

「この体はもう私のものなんだ！ 今度姿を見せたら命はないと言っただろう！」

双眸を吊り上げた青年はミルテの存在を完全無視し、部屋の入り口へと逃げるフロンの後を追いかけたのだ。

なんなの？ 突然の変貌についていけない。

だが実験台に積まれた分厚い本の一冊を手に取り、振りかぶる青年を目にした時。

「なにをするの！」

ミルテは咄嗟の行動に出ていた。すなわち、瓶を投げつけた。フロンの入っていたガラス製・マグカップ大のずっしりした瓶を。

ガッン！

それは見事に青年の後頭部を直撃。青年はうっと呻き声を上げて床にしゃがみこむ。

「ミルテ！ ポーションだ！」

焦りながらも力強いフロンの声が響いた。

訳がわからないが、理由なんて後からでもいい。とにかく今はフロンを信じるしかない。

ミルテは鞆を開き、それを取り出した。

赤紫色の毒々しい液体——恐らく、失敗作であろうケロケロポーション（もどき）。

フロンに「もしもの時のためにこれを持っていけ」と言われた時は、もしもってなんだろう、と首をかしげたものだが、今思えばフロンはこういう事態が起こるのを予測していたわけだ。

「最初に——言っというてよね！」

百とある文句をひとつにまとめて吐き出しながら栓を抜き、思いっきり床を蹴りつける。

振り返る青年の顔に、瓶ごと叩きつける勢いで、効果不明の怪しい液体を浴びせかけた。

「な——っっ！」

死んだらどうしよう、でもフロンを殺そうとした奴だし、むしろ効果がなかったらどうしよう、てゆーかあの優しい態度はなんだったのよ、いい人だと思ったのに！ 色々な思いが交錯し、頭がごちゃ混ぜになる。

でもひとつだけ、はっきりしていることがあった。

（フロンを殺そうとしたことだけは、絶対に許せない！）

どろん、と白い煙があがった。

変身の効果を示す煙だ——ということは、かろうじて変身の薬ではあったらしい。

すぐに薄れゆく煙の中で、ソル・アルマンだったものかもぞもぞと床を蠢く。

それを見た瞬間、ミルテは声にならない悲鳴をあげた。

蛇だ。黄色と黒のまだらもよの蛇が、ちろちろと舌を出しながら床を這いずっている。

「いやあああああ！」

全身に鳥肌が立った。本能的に瓶を投げつけた。今度はケロケロポーション（完全に失敗作）が入っていた空瓶だ。

「しめた！ ミルテ、鏡だ！ 机にある鏡に、俺とこの蛇と一緒に映すんだ！」

フロンがびよこびよここちらに向かいながら叫ぶ。

震える足に活を入れ、ミルテはフロンに言われるまま机に体を向けた。鏡を手に振り返ると、瓶が当たった部分を苦しそうにくねらせる蛇の横で白い煙があがる。

どうやら床にこぼれたポーションをフロンが舐めて変身したらし

い。

同じ姿——黄色と黒のまだらもようというなんとも気持ち悪い蛇が二匹。思わず顔を背けながら、ミルテは鏡を向けた。

その瞬間。

真っ白な閃光が迸った。

自分の手から——いや鏡から、真夏の太陽の輝きをもつ光が放たれている。それは束の間辺りを照らしたかと思うと、突然、数条の鋭い光に分かたれ、矢となり、空を走り、二匹の蛇の周囲を包むように回り始める。

まばゆい不思議な光景の中、ぼんやりとした影がそれぞれの蛇の上に浮かび上がった。

長い髪。すらりとした手足。徐々にはつきりしてくるその影は、人の形を成している。一体は男で、一体は女の影だろうか。

と、気づいた時には、ふたつの影は交差し、するりと位置を換えていた。

魔法だ。これは魔法だ。

とんでもなく、強力な魔法が発動している。

呆然とするミルテの目の前で、人型の影は二匹の蛇の中に吸い込まれていき——、

「なに？ なに？」

光は消え、いつのまにか鏡は静かに石床に横たわっていた。さっぱりわけがわからない。

「ぐあつ！ か、体が……。くそつ、我が身を蝕む不浄なる物質を浄化せよ！」

どろん、とまたまた煙があがる。

痛そうに頭と背中を押さえたソル・アルマンが煙の中から立ち上がった。

どうやら魔法で薬を解毒したらしい。ミルテはびくつと身構えた。しかし。

「観念しろドーラ！ もう好き勝手にはさせんぞ！」

ソル・アルマンの鋭い瞳は、こそそと床を這いずっていくもう一匹の蛇に向けられた。

「ちくしょう！ 捕まっただまるもんか！」

フロンの声で叫ぶ蛇は、ピッチをあげて部屋の入り口へと逃げていく。

ミルテは動けなかった。ソル・アルマンの呪文で元フロンの蛇が宙に浮き上がり、部屋の隅にある壺の中へと放り込まれ、蓋をされても、どうしたらいいかわからなかった。

しかし、一息ついて振り返った青年の顔を見た瞬間、全てが終わったことを悟った。

「フロンなのね……」

自然と口を出たその言葉は、真実を見つけた時のように、ミルテの心に鈴を響かせる。

「ああそつだ。俺が本物のソル・アルマンだ」

照れくさそうにはにかんだ青年の瞳は、まったく違う海の色でありながら、あの琥珀色の瞳とそっくりの輝きを放っていた。

「出せー！ ここから出せー！」

「まったく、うるさい魔女だな……」

「ドーラって、もしかして、ささやき谷のドーラ？」

その名前には聞き覚えがあった。

「黙っていて悪かった。ドーラにあんな目にあわされた後だったし、魔女が信用ならなかったんだ」

「入れ替わってた……？ 魂が？」

「この鏡のせいだな」

ソル・アルマンは床に落ちた鏡を拾い上げ、小さく呪文を唱えた。するとパリンツという耳障りな音をたて、真つ二つに割れる魔法の鏡。それをゴミ箱に放りながらソル・アルマンは語りだす。

「こいつはどこぞのアホ魔法使いが作った魂交換の鏡だ。本当ならどんな魂でも入れ替えられる予定だったんだろうが——同じ姿、つまり器が同じものしか入れ替えられないという欠陥品になってしま

った。ドーラはある日突然、俺の姿になってこの鏡を手に現れた」

「そうしてあなたと魂を交換したのね」

「そうだ。油断していたよ、まったく……。狙いがわからなかったんだ。まさかこんな鏡が存在するとは思わなかったからな」

「どうしてあの池に？」

「殺すのはさすがにためらったんだろうな。俺になったドーラに蛙に変えられ、魔力と言葉を封じられて、放り込まれた。あんたのあの魔法薬は、俺にかかっていた“言葉封じの呪い”を解呪したんだ。……あながち、失敗作でもなかったのかもな」

「浄化の薬……。良かった。フロンの役に立ったのね……」

フロンとの出会いを思い出し、涙が滲んでくる。無駄な挑戦かと思っていたが、あれがなければフロンに会うことはなかったのだ。

「あんたのおかげでもとに戻れたんだミルテ。本当に感謝している……。人間に恋したなんて、嘘をついて悪かったよ」

ソル・アルマン——フロンだった青年、ソルは、最初のつんけんした態度が信じられないくらいに柔らかな瞳でミルテを見た。

いや、あの態度は魔女に対する不信感からきたものだったのだろう。今思い返せば、ただの蛙にしてはおかしな点が沢山あった。花畑を眩しがったのも、魔女の体だったからなのだ。何故すぐに気づかなかったのだろう。

「うつん、気にしないで。こちらこそ、同族が酷いこととして……。でも、どうしてドーラはそんなことを……」

「魔法使いの力が欲しかったんだとさ。魔女には飽き飽きしたと言っていた。記憶は魂にも焼きつくが、脳から引き出すこともできる体が手に入ればその人間の能力を使うことができるって寸法だ」

「魔女でいるのが嫌になったのね……」

ネアとの話を思い出す。ドーラは古い血に縛られる魔女であることを嫌い、遊び呆けていると言っていた。

確かに、魔法使いを羨ましいとミルテも思った。一步間違えば、自分もドーラと同じになっていたかもしれない。そう考えると、ド

ーラを嫌いにはなれなかった。

「そんな顔するな、ミルテ。俺もドーラばかりが悪いとは思っていない。あんたのおかげで魔女のこともよくわかったし、これからは魔法使いと魔女が協力していくべき時代なんだろう。あんたらの言うとおり、魔法使いも高慢で嫌な奴が多いしな」

「そつ、そんなことつ」

やっぱり、ネアとの会話を聞かれていたのだ。どうりでやたらすねていると思った。

魔女と魔法使いとの間には互いに誤解がありそうだが、少なくとも、ソル個人の性格は、噂どおりだと思ったのはどうやら秘密にしておいたほうがよさそうだ。

しかし、それを見越したかのように、ミルテの顔を覗き見るソルの瞳がにやりと笑う。

「今でも、魔法使いは友達にしたいくないタイプだと思うか？」

「そつ」

心臓が飛び跳ねて声が裏返る。

この状況でそれを訊くのは意地悪だ。やっぱり魔法使いは性格が悪い。

と思いつつ、言い返せないのは、突然かつこよくなったフロンの真の姿になんだか負けていると感じたからではない。絶対ない。

「……フロンはもう友達なもの」

「ソル、って呼んでくれないのか？」

「あ、あんまり近寄らないで！ 面白がつてるでしょ、フロン！」
さっきまでこの姿にどぎまぎしていたのを、この元・蛙はしっかりと瓶の中で聞いていたわけだ。なんという意地の悪さか。

後ずさるミルテに、楽しげに目を光らせる青年は、どんどん距離を縮めてくる。

「もちろん。なにせあんたには暴走飛行で散々な目にあわせてもらったからな」

ね、根に持つてる！？

「今回のこと、感謝はしているが……少しくらいお返ししてもいいだろう？」

「お、お返して!？」

「これからの付き合いに禍根を残さないためにも、ひとつだけくらっつてくれ」

ずいっと迫る大きな肩と、背中に当たる壁の感触に、ミルテは固まった。しかし。

「おかげで忙しくなりそうだしな」

「え？　どういう意味……」

「魔女としての誇りを大切にするおつちよこちよい魔女と一緒にいるのは、面白すぎてどうやら癖になりそうだ、ってことかな」

それはあまりに突然で、回避しようがなかった。

額に触れてきた柔らかな熱は、すぐに離れて目の前の青年の顔に収まる。

まず息が止まった。続いて頭が真っ白になった。それから急激な熱が生まれてきて。

(ま、まさか今の……)

我に返ると同時に手が動いていた。

「ばかあああああつ！」

ばちいいいと景気のいい音をソルの頬に響かせた後、猛ダツシユで窓に突撃したミルテは、もとの大きさに戻したホウキを掴んで、一目散に外へと飛び出した。

「ミルテ！　今ホウキに乗るのはまずいだろ！　集中力が……」

え？　と思った時はもう遅い。コントロールを失ったホウキがものすごいスピードで上昇を始める。

さすがのミルテも振り飛ばされそうな勢いで、上へ下へと翻弄してくれる暴走ホウキは、やがて旋回しながら森の中へと突っ込んでいき――。

「いやあああああ！」

しかし、慣れというのは恐ろしい。いつもの数倍スリリングな飛

行の後でも、ちゃんと納まりはつくものである。

反転した世界の中で、驚いた小鳥たちが一斉に飛び立っていく。慌てた羽がむきだしのおでこを叩いては逃げていく。

もう——笑うしかないだろう。

木の枝から逆さにぶらさがったなんとも見事な恰好で、いまだ火照る頭にふと思い出されるのはあの言葉。

『人生の豊かさは、才能の豊かさでは決まらない——』

ひきつった頬が笑う。ひくひくと。

なるほど。確かに、それは真理に違いない。

才能がどうであれ、精一杯生きていれば、こんなにも人生は刺激的で、面白いのだから——。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4149n/>

ケロケロポーズション！

2010年10月8日11時15分発行